

2024 年 2 月 16 日

科目名	受験番号：	採点欄
英語	氏名：	

【1】次の英文の（ ）内に、文末のヒントを参考にして、適切な語を記入しなさい。

1. These tires were made () France. (製造された)
2. I'm pleased () the result. (満足している)
3. Out of the () comes evil. 「口は災いのもと」(諺)
4. I can't afford () buy the ticket. (余裕がない)
5. You have to learn to () before you run. 「千里の道も一歩から」(諺)
6. It's a () of cake. (楽勝です)
7. I'm looking () a store selling swimsuits. (探しています)
8. Wear your jacket, () you'll catch cold. (さもなければ)
9. Custom makes () things easy. 「習うより慣れろ」(諺)
10. She is as old as I (). (同じくらい)

【2】次の英文を指示に合った文章に直しなさい。

1. This museum was designed by my grandfather.
(能動態に) →
2. I have to get over with an unpleasant job.
(下線部の書き換え)→ I have to () an unpleasant job.
3. I want to book this room.
(同じ意味の文に)→ I want to () a reservation of this room.

【3】次の日本語を英語に訳しなさい。

「私は日本の古典文学に興味があります。」

→

【4】次の英文を日本語に訳しなさい。(答えは、答案用紙の裏面に渡っても結構です。)

この部分に掲載されている文章については、著作権法上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

(ニーナ・ウェグナー『教養として知っておきたい世界の重大事件』による。)

→

受験番号「 」 氏名「 」

受験者は、配点の基準を選択することができます。

A	①	4.0点	②	4.0点	③	2.0点
B	①	6.0点	②	2.0点	③	2.0点

C	①	2.0点	②	6.0点	③	2.0点
---	---	------	---	------	---	------

① 古典文学

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

* 蟻通ありしほしの明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神の病ませ給ふとて、歌よみてたてまつりけん、いとをかし。

この蟻通とつけけるは、まことにやありけん、昔おはしましける帝の、ただわかき人をのみおぼしめして、四十になりぬるをば、うしなはせ給ひければ、人の国の遠きに行きかくれなどして、①さらに都のうちにさる者のなかりけるに、中将なりける人の、いみじう時の人にて、心などもかしこかりけるが、七十近き親二人を持たるに、かう四十をだに制することに、まいておそろし、とおぢさわぐに、いみじく孝なる人にて、②遠き所に住ませじ、一日に一たび見ではえあるまじとて、みそかに家のうちの地を掘りて、そのうちに屋をたてて、こめ据ゑて、いきつつ見る。人にも、おほやけにも、失せかくれにたる由を知らせてあり。なか、家に入りゐたらん人をば知らずもおほせかし。うたてありける世にこそ。この親は上達部などにはあらぬにやありけん、中将などを子にて持たりけるは。心いとかしこう、よろづの事知りたりければ、この中将もわかけれど、いと聞えあり、いたりかしこくして、時の人におぼすなりけり。

唐土もろこしの帝、この国の帝を、いかで謀りてこの国討ちとらんとして、つねにこころみごとをし、あらがひごとをしておそり給ひけるに、つやつやとまるにうつくしげに削りたる木の二尺ばかりあるを、③これが本末いづかた」と問ひに奉れたるに、すべて知るべきやうなければ、帝おぼしわづらひたるに、いとほしくて、親のもとにいきて、「かうかうの事なんある」といへば、「ただ、速からん川に、立ちながら横さまに投げ入れて、返りて流れんかたを末とするして遣せ」と教ふ。まありて、我が知りかほに、さて、「こころみ侍らん」とて、人と具して、投げ入れたるに、先にしていくかたにしるしをつけて遣したれば、まことにさなりけり。

ほどひさしくて、*七曲ななわだにわだかまりたる玉の、中通りて左右に口あきたるがちひさきを奉りて、「これに緒通して賜はらん。この国にみなし侍る事なり」とて奉りたるに、「いみじからんものの上手、不用なり」と、そこらの上達部・殿上人、世にありとある人いふに、また行きて、「かくなん」といへば、「大きな蟻をとらへて、二つばかりが腰にほそき糸をつけて、またそれに、いますこしふとさをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見よ」といひければ、④さ申して、蟻を入れたるに、蜜の香をかぎて、まことにいとくあなたのおより出でにけり。さて、その糸の貫かれたるを遣してけるのちになん、「なほ日の本の国はかしこかりけり」とて、のちにさる事もせざりける。

(『枕草子』より)

* 蟻通の明神 — 和泉国にまつられていた神。

七曲にわだかまりたる玉 — 七曲がりにくねくね曲がっている玉

問一 傍線①「さらに都のうちにさる者のなかりけるに」について、次の各問に答えなさい。

1 「さる者」とはどのような者を指すか、答えなさい。

2 傍線①のような状況になった理由を述べなさい。

問二 傍線②「遠き所に住ませじ、一日に一たび見ではえあるまじ」を現代語訳しなさい。

問三 傍線③「これが本末いづかた」を、「これ」の指す内容を明らかにして現代語訳しなさい。

問四 傍線④「さ申して、蟻を入れたるに、蜜の香をかぎて、まことにいとくあなたの口より出でにけり」を、「さ」の指す内容を明らかにして現代語訳しなさい。

次のA・Bは小説の冒頭部であり、Cは評論の冒頭部です。これを読んで、後の問①・②に答えなさい。

A

山路に登りながら、かう考へた。
 智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。
 鬼角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、画が出来る。

人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒両隣りにちら／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行く許りだ。人でなしの国は人の世よりも猶住みにくからう。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに画家といふ使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊とい。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き抜いて、難有い世界をまのあたりに写すのが詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云へば写さないでもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さぬとも、珍鏘の音は胸裏に起る。丹青は画架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自から心眼に映る。只おのが住む世を、かく観じ得て、靈台方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうら／＼かに収め得れば足る。この故に無声の詩人には一句なく、無色の画家には尺練なきも、かく人世を観じ得るの点に於て、かく煩

悩を解脱するの点に於て、かく清浄界に出入し得るの点に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの点に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの点に於て、――千金の子よりも、万乗の君よりも、あらゆる俗界の寵児よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして明暗は表裏の如く、日のあたる所には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はいかと思ふて居る。――喜びの深きとき憂愈深く、樂みの大いなる程苦しきも大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片付けやうとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖えれば寝る間も心配だらう。恋はうれしい、嬉しい恋が積もれば、恋をせぬ昔がかへつて恋しかる。闊僚の肩は数百万人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。……

余の考がこゝ迄漂流して来た時に、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏み損くなつた。平衡を保つ為めに、すはやと前に飛び出した左足が、仕損じの埋め合せをすると共に、余の腰は具合よく方三尺程な岩の上に御りた。肩にかけた絵の具箱が腋の下から躍り出した丈で、幸ひと何の事もなかつた。

立ち上がる時に向ふを見ると、路から左の方にバケツを伏せた様な峰が聳えて居る。杉か檜か分らないが根元から頂き迄悉く蒼黒い中に、山桜が薄赤くだんだんに棚引いて、続き目が確と見えぬ位霧が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんで、眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭どき平面をやけに谷の底に埋めて居る。天辺に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ判然して居る。行く手は二丁程で切れて居るが、高い所から赤い毛布が動いて来るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難義だ。

道がつづら折りになつて、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追つて来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき、学生カバンを肩にかけてゐた。一人伊豆の旅に出るから四日目のことだつた。修善寺温泉に一夜泊り、湯ヶ島温泉に二夜泊り、そして朴齒の高下駄で天城を登つて来たのだつた。重なり合つた山々や原生林や深い溪谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでゐるのだつた。そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲つた急な坂道を駆け登つた。やうやく峠の北口の茶屋に辿りついてほつとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまつた。余りに期待がみごとに的中したからである。そこに旅芸人の一行が休んでゐたのだ。

突つ立つてゐる私を見た踊子が直ぐに自分の座蒲団を外して、裏返しに傍へ置いた。

「ええ……。」とだけ言つて、私はその上に腰を下した。坂道を行つた息切れと驚きとで、「ありがたう。」といふ言葉が咽にひつかかつて出なかつたのだ。

踊子と真近に向ひ合つたので、私はあわてて袂から煙草を取り出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引き寄せて私に近くしてくれた。やつぱり私は黙つてゐた。

踊子は十七くらゐに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結つてゐた。それが卵形の凛々しい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和してゐた。髪を豊かに誇張して描いた、神史的な娘の絵姿のやうな感じだつた。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏を着た二十五六の男がゐた。

私はそれまでにこの踊子たちを二度見てゐるのだつた。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会つた。その時は若い女が三人だつたが、踊子は太鼓を提げてゐた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思つた。それから、湯ヶ島の二日目の夜、宿屋へ流して来た。踊子が玄関の板敷で踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下して一心に見てゐた。――あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南に越えて湯ヶ野温泉へ行くのだらう。天城七里の山道できつと追ひつけるだらう。さう空想して道を急いで来たのだつたが、雨宿りの茶屋でびつたり落ち合つたものだから、私はどぎまぎしてしまつたのだ。

半年のうちに世相は変わった。醜^{しづ}の御楯^{みそだて}といでたつ我は。大君のへにこそ死なめかえりみはせじ。若者達は花と散ったが、同じ彼等が生き残って闇屋^{くらやみ}となる。ももとせの命ねがわじいつの日か御楯とゆかん君とちぎりて。けなげな心情で男を送った女達も半年の月日のうちに夫君の位牌^{いは}にぬかずくことも事務的になるばかりであろうし、やがて新たな面影を胸に宿すのも遠い日のことではない。人間が変わったのではない。人間は元来そういうものであり、変わったのは世相の上皮だけのことだ。

昔、四十七士の助命を排して処刑を断行した理由の一つは、彼等が生きながらえて生き恥をさらし折角の名を汚す者が現れてはいけないという老婆心^{らうばしん}であったそう。現代の法律にこんな人情は存在しない。けれども人の心情には多分にこの傾向が残っており、美しいものを美しいままで終らせたいということは一般的な心情の一つのようだ。十数年前だかに童貞処女のまま愛の一生を終らせようと大磯のどこかで心中した学生と娘があったが、世人の同情は大きかったし、私自身も、数年前に私と極めて親しかった姪^{めい}の一人が二十一の年に自殺したとき、美しいうちに死んでくれて良かったような気がした。一見清楚な娘であったが、壊れそうな危^{あやふ}なさがあり真逆^{まぎやく}様に地獄へ墮^おちる不安を感じさせるところがあった、その一生を正視するに堪^たえないような気がしていたからであった。

この戦争中、文士は未亡人の恋愛を書くことを禁じられていた。戦争未亡人を挑発墮落させてはいけないという軍人政治家の魂胆^{こんたん}で彼等達に使徒の余生を送らせようと欲していたのであろう。軍人達の悪徳に対する理解力は敏感であって、彼等は女心の交り易さを知らなかったわけではなく、知りすぎていたので、こういう禁止事項を案出に及んだままであった。

いったいが日本の武人は古来婦女子の心情を知らないと言われているが、之^{これ}は皮相の見解で、彼等の案出した武士道という武骨千万な法則は人間の弱点に対する防壁がその最大の意味であった。

武士は仇討のために草の根を分け乞食となっても足跡を追いまくらねばならないというのであるが、真に復讐^{ふくしゅう}の情熱をもって仇敵の足跡を追いつめた忠臣孝子があったであろうか。彼等の知っていたのは仇討の法則と法則に規定された名譽だけで、元来日本人は最も憎悪心の少い又永続しない国民であり、昨日の敵は今日の友という楽天性が實際の偽らぬ心情であろう。昨日の敵と妥協呑肝胆^{くわくくわんたん}相照らすのは日常茶飯事^{にちじょうさはんじ}であり、仇敵なるが故に一そう肝胆相照らし、忽ち二君に仕えたるし、昨日の敵にも仕えたがる。生きて捕虜の恥を受けるべからず、というが、こういう規定がないと日本人を戦闘にかりたてるのは不可能なので、我々は規約に従順であるが、我々の偽らぬ心情は規約と逆なものである。

問① A・B・Cの作品名と作者名を記しなさい。

作品名

作者名

	A	B	C
作品名	〱	〱	〱
作者名	〱	〱	〱

問② A・B・Cの中から一つを選び、作品の内容・表現（視点や語り手、文体、技法など）について説明しなさい。文学史的意義に関する記述をもって説明に代えてもかまいません。

3 文学史

次の日本文学史上の用語(ア)～(エ)について簡潔に説明しなさい。

(ア) 『懐風藻』

(イ) 八代集

(ウ) 上田秋成

(エ) 『小説神髓』